

ある実証研究者のうら話

藤 田 敬 三^{*}

昔の留学生時代の思い出話でもという編集の方からの御注文だが、何にしろ半世紀前の経験だから現代の若い人達のお役にたち得ないのは勿論、感覚や価値観の共通性もあやしいものなので、紙の無駄使いに終りそうで実に気がひける次第だが、出来るだけ手短かなところで約束を果させて貰うことにします。

私は大正10年の京大経済学部卒なので河上肇先生が盛に活躍して居られた頃でしたが私の2、3の友人等の如く在学中から先生の門を叩くというようなす早い動きは出来ず、先生の親友だった後の市立大阪商科大学の学長となられた河田嗣郎先生のゼミで、社会政策といったような生ぬるいものをやるという名の下に大学院に残ることを許されたので、「良く考えて気が向いたら出直しておいでなされ」といった朝日の村山庵平老の好意をこたわって学究の道に迷い込むことになった。というど多少恵まれた条件だったように聞えるかもしれないが、実は助手の半分の月給しか貰えない副手にありつけたに過ぎない。しかしそのお蔭で我儘で呑気な性格の私の人間を鍛えるには少々役立ったことは事実であった。副手は助手と月給で差別されただけでなく必要に応じて学校の雑用を仰せつかるために、原則として学校に詰めるという立場にも追込まれたので、考え方によっては相当の屈辱感を伴うものであっただけ発奮の原動力でもあり得た。その当時火の気の全くない経済学部図書館書庫の一隅にテーブルとは名ばかりの机（おそらく本来タイプライターの台だったらしいもの）にゴッホの画に出て来るような腰掛けを頂戴して、主に経済論叢の編集に関する雑務を担当させられて居たものである。中でも原稿を貰いに各教授の研究室をノックしたり、校正刷りを持参したりするのはなんでもないようで仲々気骨の折れる仕事だった。何しろ当時経済学の教授といえれば日本中にも数える程しか居なかったのだから、実にえらいのであり、或教授の如きは終始うしろ向けになったままの応対ときまっていた位だから、時には相当抵抗を感ずるような場面もあったが、余りこだわっては却って修業にならないから辛抱することにしていた。しかしおかげで1年間で編集に関する事務の内容については殆んどこれをマスターすることが出来、欧文タイプも自己流の雨だれ式ながら多少間に合う程度になった。こ

^{*} ふじた けいぞう 大阪経済大学中小企業経営研究所所長

の苦勞は後年大阪商科大学の経済学雑誌の編集を委された際に結実したのみならず、後述の如き一連の文献、資料関係の事務担当の基盤ともなったことを思えば無駄ばかりではなかった。

それは兎に角この1カ年は長くはなかったが学部時代とは異なり、勉強という程のことはなくとも実に緊張した期間であり、このままで今少し辛抱していたらもっと役に立つ人間になれたかもしれないのであるが、今にして思えば不幸なことにその時京大への文部省在外研究員(留学生)の割当が2、3名あり、11年春から渡欧することを命ぜられ、一人前の学究を以て待遇されることになったので、折角のたががすっかり弛んでしまって、ついつい一生平凡な職業的な教師の道を歩むことになり、自分乍ら恥かしいこととなってしまったのである。

さてその当時の渡欧は大抵印度洋から地中海廻りで約1カ月半かかってフランスのマルセイユに上陸、パリを経て独英などへ渡るとというのが通常の旅程だった。そして一度在外研究員ともなれば、美濃部達吉大先生も、吾々かけ出しのこわっぱ留学生もその待遇は同じだし、先輩達も意外に低姿勢で親しみ易く、人間的な長短もお互にかくしだてせず至極フランクにつき合ってくれるので若者にとっては正に天国に近い雰囲気、おまけに猛烈インフレ独乙20カ月の生活は客観的には全く勿体ない青春の日々であった。それだけ慾を云えば大きな悔をあとにのこしたわけだが安易な妥協からすれば世間並みのプラスも少くはなかった。例えば船の中では勿論滞欧中に得た友人は多くはいずれも生涯の心友となり、学究生活では勿論、私的な交りでも肉親以上の親近を持ち続ける間柄となった。この異常な友情は恐らく国際性浸透の現状からは殆んど想像も及ばない、なんといっても尚孤立化した在外生活の裏返しであったかも知れない。従って今日では決して賞められた生活様式ではないかもしれないが、当時としてはそれなりのプラスの面であった。物質の充ち足りた若者の生活が充実し難いことの実証をいやという程見せつけられたし、体験した年月でした。若さにかこつけてごまかし徹した大方の連中の後年の肉体的、精神的な結末は、自他にとって余りにも消耗的であり、単なる価値観の問題では割り切れない無責任なものをそこに残すような気がする。そんな環境の中でも私の在籍した大学がハイデルベルクで、接触した教師も哲学、経済学等でも世界的な人達が多く、同学にも糸井、三木、羽仁、岩崎等の元氣な連中が居たので、多少のプラスの刺激を受けたが、不幸にも油ののりきった時に呼吸器をやられて南仏に療養の半年を過ごすことになり、今1年は滞独して他日の足場になりそうなものを掴み度いと思ってひそかに懐いていた計画が台なしになったのは今から追想しても一生の恨事であった。

それは私事に過ぎないので遠慮して、当時の独逸で今に残っている印象のいくつ

かについて述べれば次のようなことがあった。第1次大戦後3、4年の当時インフレに悩む独逸であったから当然でもあったが、全体として大学の設備等を見ても図書館のようなものは別としても一般の教室や附属の建物等はヘーゲルを記念するかの如き特別の教室は兎に角としても、一般に矮小粗末で世界のハイデル大学のものとは受取れないのであった。この点大陸では万事歴史こそ誇りであり、量にとらわれない空気に溢れていた一例であったろう。それとは反対に大学の教授の待遇が格別良かったせいでもあろうが、教授銘々の私宅の書庫の大きくて充実していたのには驚きであった。比較的貧乏な私講師級の書庫でも相当なものであった。それは戦前の目覚ましい独逸の世界進出の結果たるこの国の全般的繁栄の一面でもあったろう。然もその往時を決して過去った繁栄としてではなく、遠からず奪回する当面の目標として追想している点にこの民族の重厚で粘着力のある個性を見ることが出来た。このある意味での頼もしく堅実な（稍粗野、頑固だが忍耐強く、一度信頼すれば絶対的といった）性格は勿論長い特殊な環境からも鍛えられた結果でもあろうが、少々軽佻浮薄の感ある我々日本人からすれば印象的なものであった。

また独逸での日常生活で珍らしく思われたことの一つに所有権の觀念、それからユダヤ人に対する人種的差別の意識は特にこの国特有のものと思われた。前者の例としては、仮に私がこの国の友人に何かある品物を与える約束をしたとすれば、その理由はさておき、その友人は債権者になった積りでいつ迄も督促することを忘れないし、それは一般に通用することなので、この約束を軽視したり、破ることは人格を疑われることになる。軽はずみの手形を発行することは禁物なのである。今一つの人種問題は色々の理由はあるかもしれないが、われわれ東洋人からすれば一概に納得の出来ない場合が多かったが独逸人にとってはヒトラーでなくても全く共に天を載くことを肯じない気持ちの人目をはばからず発散させるのにはお相手させられる方が参る程の強烈な差別意識であった。この二つの習慣や意識に関する民族による特異性は日本人には又それなりのものが当然ありうる筈であるが、当時の吾々少数の留学生の場合は接触範囲も多くはアカデミカー（大学卒業者）及びその周辺者に限られていたので、その中に相互の理解が得られることが多かった。しかし最近の国際化情勢の中での大衆の国際交流においては思わぬ偏見と誤解が余りにも多く、とりわけ南北問題では、世界平和の促進にとって少なからぬ障害となる恐れがある。

わき道から返って今一つの独逸の体験で日本の大学に関係ある重大なものを挙げれば、当時のように日常の生活にも事かくインフレの最中でも独逸の大学の教室では随分多数の老中年の男女聴講生（課目によって、又教授の名声によって差はあるが、多い場合は½にも近い聴講者）が居たことである。我国でも今日の社会情勢か

らずれば不可欠と思われる生涯教育の意味における中高年者の聴講制度がもっと普及して然るべきだと思ひ、私どもはその私見を発表したこともあるが未だにその反響は実にピアニシモ的なのは全くなさけない限りである。今一つの驚きは9月1日の関東大震災の折に、東京に独逸の一般のビル（5階程度）よりも高い東京海上ビル等が存在する新聞写真を見て、独逸人が人力車と富士山と Geisha 以外に注目に価するもののあることをこの機会に認識したような口振りには少々まいったのであった。少くとも第1次大戦で20億円近い正貨を溜め込んで世界一為替の強い日本を以て任じて居た我々にとっては日本に関する西歐人の知識や関心が如何に僅少であるかをいやという程思い知らされたのであった。

さてハイデルベルグ医学部の第一人者（エンゲリンといったと思うが）に左の肺に大きな穴が空いている、即刻独逸を退去して南方の暖地で療養する他手がないと脅迫されて23年の大晦日に独逸を立った私は結局翌1月南仏ニースの近郊のホテルに滞在中、幸運にも講和特使西園寺公付きの医博で後の名大総長になられた勝沼精蔵氏の厚意で手あつい診断と助言や激励を受け予想よりも早く解熱快方に向ひ、従来コンプレックスを感じていたフランス語をどうにかしのいで半年程を過した上、パリのオペラ座や博物館を独り歩きしながら5月の初旬に渡英することが出来たのであった。英国では同郷の田岡君が待ち合せてくれたので、10日ばかり連れだつて各地を一通り経廻つたが、ケンブリッジやオックスフォード大学の落ち着いたたた住いには年輪の重圧を感じたがエジンブルではその日の天候の加減もあつてか予想して居たよりは明るい文化的な感じをフルに受けた。グラスゴーは喧騒、マンチェスターのスモッグは聞きしにまさるものがあり、リバープールに5万噸級の汽船が居たのは印象に残つた。マルクスの墓、スミスの邸宅等々には特に感銘を持つ程でもなかつたが、ハイドパークの討論台や、見て見ぬ振りの紳士振りには珍らしさは充分だつた。しかし何んといつても3カ月の大部分を過した大英図書館での読書は今となつては生涯の記念すべき毎日となつた。マルクスが手にした筈の文献なども感慨なしにはひもとくことが出来なかつた。間もなく再度の訪英でザンマイの機会を持つことを心に誓つて別れたのを昨日のように覚えている。少くとも数年の中には今1、2度渡欧することを本気で予定していた自分としては大陸でも英国でも見て歩きは原則として排斥という方針を貫いてきたので、いわんや伊太利、ギリシャ、イベリヤ半島、北欧などは殊更に無視したのであつた。が思わぬ第2次大戦等もあつて結局その後の50年を経過した今日、特に再訪の効果もなくなつた形で尚懸案のままであるのは思わぬ因縁である。序でに英国での大失敗を一つ挙げれば、折角だから英会話を少々習熟したいと新聞広告を見て応募してきた中年者の中学の教師とかいう正直そうな人を雇うことにして週3日1カ月程やつて見たが、どうも

成果が挙がりそうになく英語の発音が本格的にはむづかしいことは聞いていたが、どうもいつまでたっても私の耳が馴れにくいのでおかしいと思っていたら、結局この先生元来生粋のアイレでアイリッシュの英語が正直なところぬけ切れぬと白状する始末で、かわいそうだがことわったが、別な教師をとる時間もなく、とうとう折角の機会を逸して今に至る迄大損害ということになったのは何んとも話にならない経験。

次は外遊中の書物買入れのことで、独乙は失敗、英国では成功という経験。Leipzig の大きな本屋で Conrad の年報を買うことになり、手附まで入れておいたのに然もポンドで取引きということであったのに、先方の手違いではあるがどうしても5割増にしてくれと背かないので残念乍ら破約したのは独乙人を信用し過ぎた失敗例である。今一つは友人に哲学関係の者が多かったので、経済学方面は後廻しにして置いた処へ病気のための急遽退独となったので系統的な専門図書の買入れが出来なかった。この御蔭で英国では少々計画通りに文献集めが出来、殊に統計方面では統計協会雑誌の完全なものを Foyle 書店から手に入れる等の成功を納めた。併し当時英国の物価は世界一の高さで独乙で1年分の滞在費も3カ月でパーになり、米国を廻る余裕もなく再び印度洋廻りで2年半振りに帰国、10月彦根高商（後の滋賀大）に赴任した。4年後に創設の大阪商科大学に転任して約30年に亙る私の学究生活の大部分を其処で過した。

この大学は当時我国経済政策学界の第一人者で東京高商（現一橋大学）の教授から転じて大阪市の助役となり、間もなく市長に就任せられた関一博士がその敏腕を縦横に発揮して関西財界を名実共に日本経済の拠点たらしめた当時の発意と業界の熱意とにより全国最初の公立大学として特設せられたものであった。学長は市長自身が破格の優遇を以て京大から迎えられた河田嗣郎博士であったので教職員の待遇はもとより、施設面の充実にも特別の努力がはらわれ、とりわけ図書館の充実には惜みなく多額の予算が投入せられ、昭和4年の創立間もなく当時の学界垂涎のゾンバルト文庫、福田文庫等を擁する日本有数の図書館を誇るに至ったのであった。勿論このような成果は市長、学長の手腕にまつ処であったとはいえ、そこには山岡氏らを初めとするビブリオテーカー諸氏の努力に負う処が少くなかった。当時創立事業の末端に連なり、又経済研究所の事業に終始関係し、特に各般の編集事業等にもタッチして、測らずも往年京大副手時代の経験を生かし得た筆者からすれば、大学の発展における研究施設、図書館等の占める役割の重要性を人一倍痛感させられたものである。私事に深入りして恐縮であるが、大学並に研究所の出版物、例えば機関雑誌たる経済学雑誌を初め、経済学文献月報、経済学辞典7冊、経済学小辞典、世界経済年表、経済学文献大鑑、経済資料総覧等はその関係者たることを私のひそ

かに誇りとする処であり、専攻の工業政策における実証研究もこの種の作業に刺激されて思わぬ成果を挙げ得たことを記憶している。のみならず現在経大中小企業経営研究所の関係者として、文献、資料の事業の末端に連なり、国際的にも多少の意味ある作業の開拓に夢を托しているのもその延長に他ならないのである。ただ商科大学時代のことを顧みると今日の経大は勿論、他の私大の財政状態は実に乏しいものであり、個別の努力による国際的事業の達成など思いもよらぬ現状はGNPに対して実に恥かしい対照である。長期には兎に角、各大学が一層協力の度を深めて、この方面における知識集約化のモデルを作り上げる以外には当面の壁を打開する道はあるまいと真剣に考えている次第である。

各 種 雑 誌
合 本
図 書 修 理

製 本

各大学官庁及会社御用達



日本図書製本株式会社

本社 東京都江戸川区東小岩 1-30-4

工場 東京都江戸川区北篠崎 2-248

電話 東京 (03) 670-8631番(代)